法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

王士禎について

原田, 禹雄 / HARADA, Nobuo

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
24
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
11
(発行年 / Year)
1998-03-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002581

Hosei University Repository

王士禎について

原田禹雄

はじめに

琉球の歴史のなかに、王士禎の名で登場する中国の人物が二人いる。『沖縄文化叢論』の八三頁と八四頁に、東恩納寛惇は次のように論及している。

〈〔附記〕同名異人　万暦三十四年（一六〇六）、尚寧冊封副使王士禎は、漁洋山人と同名ではあるが異人である。明末清初の詩宗として、その盛名北宋の歐陽脩、蘇東坡と竝び称せられた三漁洋も名は士禎、一時期の崇禎帝の廟諱を避けて士正と改名したが、清の乾隆三十九年に（流転日久しくして、後世幾んど復何人たるを知らざらん、今改めて士禎と為すべし）との優詔を賜って

Hosei University Repository

旧名士禎に復した。

歴代使録に冊使姓名を録した中に、李鼎元使録だけは、何故か副使行人王士禎を王士正としてある。それに、漁洋山人の王士禎も、行人王士禎も共に山東の出身である為めに、両者を混同すること一段と太だしい。万暦の行人王士禎の伝記は明史列伝にも出してないので、詳しく知り得ないから、ここでは漁洋山人の事を挙げて、その同名異人である事を明にしておきたいと思ふ。

漁洋山人の伝記は明史列伝及び清史列伝にも出て居り、漁洋山人精華録纂註には、その墓銘・世系及び禹士鼎の筆になる肖像もあり、その他、漁洋詩話・池北偶談等には交友紀遊の事も詳しく出てゐるからその經歴最も明白である。明末天啓六年（一六二二）に生れ、清初康熙五十年（一七一一）に七十八歳で卒した。万暦の使事から、二十七年後に生れたわけである。

家は山東新城（万暦の王士禎は泗水）の望族で、その為めに新城先生とも呼ばれ、書斎石帆亭が春草池の北に在った為めに、池北の別号がある。父祖五世に亘る翰林の家で、兄弟皆詩名籍甚してゐる。官は刑部尚書にまで登った人であるが、康熙十九年から、同二十三年までは、国子監祭酒の職に在った。恰度この時期に、門人汪楫・林麟焻等が、尚貞冊封正副使として渡海、北京留学生復活について尚貞の訴願を容れ、王漁洋がこれを採択して目的を達する事が出来た。その時、漁洋祭酒の覆申には（慕文教、琉球於諸国、為最篤。国家待之、亦為最優。）とあった。明清交替の際に中断した北京留学生が、ここに再び復活される事になった》。

まことに明快な論述である。だが、東恩納寛惇のいうように、二人は同名異人なのであろうか。検討を加える。

王士禎

万暦三十四年（一六〇六）、尚寧の冊封副使として、正使の兵科右給事中の夏子陽と共に渡琉した、行人司行人の名は王士禎（おうしてい）である。禎は木ヘンであって、示ヘンではない。これは、私自身が訳注をすすめている夏子陽使録からみてまちがいはない。この使録の会稽夏氏宗譜本も、台湾学生書局刊行の写本影印も、ともに王士禎とあって、王士禎ではない。さらに『歴代宝案』もまた、尚寧あての詔勅と咨文は、すべて王士禎と書かれている。最近出版された『歴代宝案』訳注本も、当然のことながら、王士禎と正しく植字されている。

禎の字は、発音はzhēn、テイまたはチョウ。めでたいしるし、さいわい、ただしい、よい、などの意味がある。この字については、次のような使用法がある。清の世宗憲皇帝の廟諱が胤禎であるので、禎の字を敬避して禎の字を用いるのである。

禎の字は、発音は同じくzhēn、テイまたはチョウ。ねずみもち、はしら、もと、などの意がある。築地を作る時の両側の柱、ということか、固い木ということかは、私にははっきりとはしないが、中

Hosei University Repository

国の人の名には、比較的用いられる文字である。

槙と禎とは、形がきわめてよく似ているために、混同されがちである。『神宗実録』という王士槙と同時代に書かれたものでさえ、すでに混乱が生じている。『神宗実録』三六五万暦二十九年十一月己酉や、同書四一一万暦三十三年七月戊寅の記事は、王士槙と書かれているが、それと同じ記事が異本ではすでに王士禎と誤まられている。そして王士槙の名に、〈王士槇〉とか〈王禎〉といった誤記まである。

汪楫は、主として『明実録』に依拠して『中山沿革志』を撰した。『明実録』自体が、王士槙の名をさまざまに書いているために、汪楫自身、王士槙の名のどれが正しいかについては迷ったことと思われる。そして、『中山沿革志』には、万暦丙午の副使の名を王士禎と記載した。汪楫が『中山沿革志』に王士禎と書けば、それ以後の冊封使録すべてが、王士禎と書くことは、容易に考えられることである。たとえば、永楽二年（一四〇四）に琉球へ派遣された行人の時中は、察度の諭祭・武寧の冊封・汪応祖の冊封・山南への冠帯の頒賜のいずれかの使者であったが、そのうちのどれであったかは明らかではない。ところが、汪楫が『中山沿革志』で時中が武寧を冊封したと書いた。蔡鐸が『中山世譜』で、武寧について、

〈永楽二年甲申、皇帝は封じて中山王と為す。詔使並びに賜るところの物件、皆伝わらず〉

と記しているにもかかわらず、蔡温は父のその記述を、『中山沿革志』によって、

〈二年甲申、成祖は行人の時中を遣わして、詔をもたらして国に至り、祭賻するに布帛を以てし、并びに武寧を封じて中山王と為せり〉

と改めてしまった。そしてその誤りは、今もなお続いている。またたとえば、尚元の冊封は嘉靖四十年（一五六一）である。ところが汪楫は、これを四十一年だと『中山沿革志』に書いた。蔡鐸は『中山世譜』で

〈四十年辛酉、皇帝は正使の郭汝霖と副使の李際春とを遣わして、封じて中山王と為し、且つ先王尚清を諭祭せしむ〉

と正しく紀年しているが、蔡温は『中山沿革志』によって、四十一年壬戌にしてしまった。そして、嘉靖四十一年は、現在も多くの著書に書きつづけられている。

汪楫の『中山沿革志』の影響が、このように現在まで続いているわけで、従って、東思納寛惇が、万暦丙午の副使を王士禎という名と信じて疑がわなかったのは無理もない。かくて、まず漁洋山人が王士禎という名だとしても、万暦丙午副使の名は王士槙であるから、東恩納寛惇のいう「同名異人」が成立しなくなったといえる。

王士禛

東恩納がくわしく紹介した清の漁洋山人の名は王士禛（おうししん）である。字は貽上。号は阮亭・漁洋山人・詩

Hosei University Repository

亭逸老など。諡は文簡。順治の進士。詩をもって海内に鳴り、一代の宗匠であった。朱彝尊とともに朱王と詩才を並び称され、また兄の士禄、士禧・士祜も詩名が高かった。士禎兄弟がみな示ヘンの名をもっていることは、乾隆帝の与えた禎の字につながるものと考えられる。書室を帯経堂・池北書庫・落箋堂・信古堂という。著書には『帯経堂集』『漁洋詩文集』『精華訓纂』『池北偶談』等々すこぶる多い。

禎の字は、発音はchēn、シン。まことをつくしてさいわいをうける意味がある。すでに述べたように、禎の字を敬避して禎の字を用いる。

王士禎もまた、琉球とはゆかりの深い人であった。彼の詩の門弟の汪楫と林麟焻とが、尚貞の冊封正副使として渡琉した。尚貞は、明・清交替期に、長らく杜絶していた琉球官生の国子監の入監をねがって、汪楫と林麟焻とにその代奏を願い出た。汪楫の冊封使録の『冊封疏鈔』には、汪楫の国子監入監に関する題本と、礼部の国子監入監に関する題本とが収録されており、そのいきさつがくわしく記されている。そのとき、王士禎はちょうど国子監祭酒であった。そして礼部からの咨に対して答えた文書が『琉球入太学始末』に出ている。小篇ではあるが、明代以来の琉球読書生の経緯を簡潔に記し、そして東恩納があげた

〈文教を慕うこと、琉球は諸国に於て最も篤しと為す。国家は之を待するに、亦最も優しと為す〉の語で結んでいる。この文書には、更に北京国子監に入監した最初の官生のことも記されている。明代は、琉球の官生は南京国子監で読書をした。清代になって、北京国子監へ入監するようになる。琉球にとっては、忘れてはならない人名なのである。

その王士禎の名は、彼の死後、王士正と改められ、そして乾隆帝によって王士禎とされるのである。その経緯を記す。

東恩納は、〈崇禎帝の廟諱を避けて〉と書いているが、荘烈愍皇帝の廟諱は由検であって、王士禎には敬避すべき文字はない。年号の崇禎も、禎とは何の関係もない。東恩納の冒頭にあげた文中には、私には理解でないことがある。たとえば、王士禎が『明史』にあげられている、とするのだが、『明史』には、列伝の外国の琉球に万暦丙午の副使として王士禎の名はあるが、王士禎の記録はない。王之楨(王之禎)とまちがえているのではなかろうか。三漁洋というのも、私にはわからない。主題からはずれるので、これくらいにしておこう。

敬避すべき廟諱をもつのは、すでに觸れたように清の世宗憲皇帝の胤禎なのである。従って、王士禎の生存中は、彼は王士禎で通したはずである。私は呉震方の『説鈴』が好きで、ちょっと疲れた時に、気分転換のために読んでいる。そのごく最初に『隴蜀余聞』が収載されていて、

Hosei University Repository

《済南王士禛貽上著》

と著名者が記されている。康熙四十四年の時点で、禛の文字は使用されているのである。もっとも、嘉慶四年の重刻本も、〈王士禛〉のままで、ひやりとさせられる。ともあれ、雍正以後は、王士禛の文字は使用できなくなったのである。

そこで後人は、王士禛の名を王士正と改めた。禛はchēn、正はzhēng、まあ似た音といえばいえないことはない。王士禛が詩名は高く、且つ彼の兄弟すべてが示ヘンの文字をもつところから、詩作家であった乾隆帝が、王士禛のもとの名に近い王士禎の名を与えたのである。王士禛は、彼の死後、彼の知らぬうちに、王士正となり王士禎となったのである。

王士禛に王士禎の名を与えた乾隆帝の名は、弘曆であった。清の時憲曆は、乾隆帝のために時憲書と名をかえ、満州帝国まで時憲書が用いられた。

世宗憲皇帝の廟諱の胤禛の敬避の普通のやり方は、胤は允の字を用い、禛は禎の字を用いる。従って、王士禛を王士正としたことは、いささかゆきすぎで、乾隆帝が与えた王士禎の名の方が、常識に近い。

皇帝の諱を上奏文の中で用いた者は杖八十、他の文書に用いた者は笞四十、名前に用いた者は杖一百と、仲々厳しい罰則があった。科挙の中で用いると、その文は録せられることなく、以後二科間の受験が禁ぜられた。従って進士ともあろう人は、すべて廟諱の敬避については知りつくしていたはず

である。

にもかかわらず、李鼎元は、禎の字そのものを敬避すべき字と思いこんでいたらしい。更に、この禎の字を敬避すべき字に正を用いると思いこんでいたらしいのである。李鼎元は、『使琉球記』に万曆丙午の副使を王士正と書いている。王士禛の名が、彼の死後、王士正と改められたことを知っておれば、万曆丙午の副使を王士正とした李鼎元の誤りの原因がわかるのだが、どうやら東恩納寛惇は、漁洋山人の本名が王士禛であったことを、全く知らなかったようである。王士禛は、東恩納寛惇のいうような〈旧名士禎に復した〉のでは決してない。李鼎元が、禎の字を敬避して、正の字を用いるべきとカンちがいしていた何よりの証拠に、彼は崇禎の年号をまた、崇正としてしまっている。

清の治世下では、王士禛の名は敬避の対象となる。しかし、今日では、王士禛の名を王士禎と書くべき理由は全くない。王士禛と固有の名にもどして何の支障もない。清代、孔子の名の丘を敬避して、すべて邱の字が用いられた。しかし、今はまた丘の文字が用いられている。であるならば、たとえば、京都大学人文科学研究所の図書目録の人名索引に、王士禛の名が用いられているように、二人の王士禎の名も、正しく王士楨と王士禛に改められるべきである。

Hosei University Repository

まとめ

琉球の歴史にあらわれる王士禎の名をもつ二人の中国人は、東恩納寛惇のいうような同名異人では決してない。

ひとりは、万暦丙午の副使の王士楨で、この楨の字が、禎と誤記されたものである。

いまひとりは、清の王士禛であって、雍正帝の諱の胤禛を敬避して、王士禎の名に改められたものである。

いずれも、王士禎という実名ではない。琉球の歴史の記述の際は、今後は、王士楨と王士禛と、正しく書きわけるべきである。

文献

＊沖縄文化協会『沖縄文化叢論』（法政大学出版局・一九七〇）。
＊夏子陽編・王士楨同編『使琉球録』会稽夏氏宗譜本。
＊同書。国立中央図書館本・写本影印（台湾学生書局・民国六六）。
＊『歴代宝案』（国立台湾大学・民国六一）。
＊同書。（沖縄県教育委員会・一九二二）。
＊同書訳注本。（沖縄県立図書館・一九九二）。

＊汪楫『中山沿革志』『冊封琉抄』康熙刊本。
＊汪楫『冊封琉球使録三篇』原田禹雄訳注（榕樹書林・一九九七）
＊徐葆光『中山伝信録』康熙刊本。
＊同書。原田禹雄訳注（言叢社・昭五七）。
＊周煌『琉球国志略』乾隆刊本。
＊同書。原田禹雄訳注（未刊）。
＊李鼎元『使琉球記』嘉慶刊本。
＊同書。原田禹雄訳注（言叢社・昭六〇）。
＊蔡鐸『中山世譜』（沖縄県教育委員会・昭四八）。
＊同書。原田禹雄訳注（印刷中）。
＊蔡温『中山世譜』琉球史料叢書四（東京美術・昭四七）。
＊呉震方『説鈴』嘉慶重刻本。
＊王士禛『琉球入太学始末』（昭代叢書乙集巻一二）。